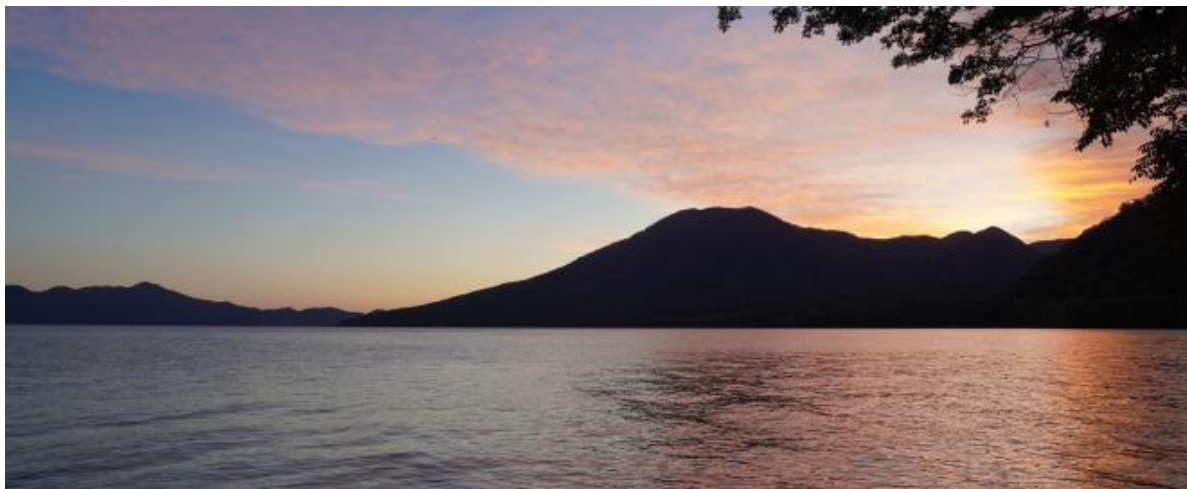


第 393 号

令和8年1月22日発行

- 巻 頭 言
- 全 日 中 大 会 報 告
- 論 文
- さ り な が ら
- 後 期 情 報
- 事 務 局 日 誌



「支笏湖の夜明けと風不死岳」

千歳市立駒里小中学校 高 橋 仁



「 突 破 力 」

北海道中学校長会 副会長 代 永 研

第66回北海道中学校長会研究大会 胆振・室蘭大会では、運営に当たられた胆振・室蘭大会実行委員の皆様、本当にお疲れ様でした、そしてありがとうございました。各分科会のグループが、学校規模の近い校長が集まるよう配慮され編成されていたこともあり、熱心に討議をされている校長先生方の姿が見られた素晴らしい研究大会でした。

その2日目、パナソニック I T S株式会社社長の田辺氏による講演がありました。話に引き込まれるテンポの良い語り、視聴者の思考をアクティブにしてくれる講演は素晴らしいものでした。その講演の前段、「あなたの強み、これだけは自信があることは何ですか？」というような趣旨の質問が投げかけられ、隣の方に言葉で伝えるというミッションが与えられました。当日参加されていた方はどう言語化されたでしょうか？数名の方の発表を聞き、自分にはない強みへの魅力を感じました。私が隣の方に語った自分の強みは「突破力」、壁にぶち当たったとき、解決策を考え克服していく力です。改めてどうしてその力が身に付いたのかと振り返ってみると、モノづくりを通して得たと思うのです。私は小さい頃からモノづくりが大好きでした。ただこだわりがあり、自分

オリジナルじゃないと気が済まないのです。レゴに始まり工作、木工作品、家具など製作したものは数知れません。そして就職してから夢中になったことが、旧車入手して分解し、自ら部品を集め再生していく旧車のレストアというものです。素人による車の再生作業は壁だらけでしたが、乏しい知識・技能、思考力・判断力を総動員し、創意工夫しながら作業を進めました。機材がなく不可能な作業を除き、エンジンの脱着も含めた完成までの作業、車検整備や日常修理も自力で行いながら車を維持し続け、途中何度か断念しそうになったものの、都度解決策を見付け突破しながら現在に至ります。半分趣味の話になってしまって恐縮ですが、学校で予期せぬことが起こったとき、壁にぶち当たったとき、リサーチして考えに考え、そのとき最良と思われる打開策を見いだしていく。振り返ってみると、趣味を通して身に付いた「突破力」が、仕事にも活かしていると感じます。誰もがもっている強みを上手に活かし、校長自身が学校経営に当たっていくこと、同時に職員の強みを活かして伸ばし、弱みをフォローし合あえる組織をつくっていくこと、そして趣味に没頭する時間、どれも大事にしていきたいです。

第 76 回全日本中学校長会研究協議会 香川大会

～ 育てよう 生きる力 創ろう 新たな時代の教育を 海とアートの香川から ～



第 76 回全日本中学校長会研究協議会香川大会は「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究大会主題とし、全国各地から 1,800 人を超える会員が参加し、レクザムホールを主会場に開催された。

3 日間の日程と主な内容について報告する。

◆日程

【第 1 日 10 月 22 日(水)】

- 13:00～13:50 全日中常任理事会
- 14:15～17:00 全日中理事会
- 13:30～14:30 全体協議会運営委員会
- 15:00～17:00 分科会運営委員会
- 18:00～20:00 レセプション

【第 2 日 10 月 23 日(木)】

- 9:45～10:10 開会式
- 10:20～11:05 文部科学省説明
- 11:15～12:05 全体協議会
- 13:30～16:45 分科会

【第 3 日 10 月 24 日(金)】

- 9:20～9:50 アトラクション
- 10:00～10:20 全体会
- 10:30～12:00 記念講演
- 12:05～12:30 閉会式

◆文部科学省説明

「当面する初等中等教育上の諸課題」

文部科学省 初等中等教育局 主任視学官
田村 学 氏



全国の中学校のトップリーダーの皆さんが参集され、全国のような課題や実践について協議いただき、その成果を今後に活かしていただくという、非常に貴重な場です。皆さんと今後の教育について考える時間にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。本日は、次期学習指導要領や教育課程の基準の改定がまさに山場を迎えていますので、その情報を皆さんと共有をまいります。

さて、皆さんには、この教育課程の基準の改定について、これまで多くの情報を提供し、動画を見ていただけるようにしてきました。しかし、情報量がかなり過多になっているのではないのでしょうか。日々の教育活動を行いながら、全てを理解することは難しいと思いますが、論点整理が出

ましたので、情報をしっかりキャッチする絶好のチャンスだと考えています。昨年 12 月に大臣諮問が出され、9 月に論点整理がまとめられました。ここで中間的な整理が行われたことになります。その後、来年中に大方まとめられ、答申、そして改定告示というスケジュール感が見えてきます。学校現場の先生方が最も重視すべきは「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものに」ということになります。要素は 3 つあり、「多様」「深い学び」そして「確か」です。メインは「深い学び」で、三位一体で充実させていこうということです。今回の教育課程基準の改定は、学習指導要領だけでなく、条件整備なども視野に入れたかなり広範なものになっており、特に校長の皆さんに関係が深い内容です。

主要な論点は多くありますが、全てを取り上げることはできませんので、本日は 4 つに絞り、皆さんと共有した後、具体的なイメージもお伝えしたいと思います。キーワードは「構造」「柔軟」「探究」「評価」です。

まず「構造」の話です。大臣諮問の最初の項目として「学習指導要領の構造化」が出ています。私たちの身の回りには、事実に関する知識と方法に関する知識があります。これらを一体化すると、方略というものになります。従来は個別の知識や技能を重点的に教えていましたが、スマートフォン時代にはその上の概念を大事にする必要があります。例えば中学校数学での個別の知識・技能と個別の思考・判断・表現は、知識を使って思考・判断・表現が発揮されることで知識がより安定し、確かなものになるということです。一つ一つの知識はより統合されて概念になり、一つ一つの思考はより汎用的な方略になる、このような構造イメージをもつことができます。なぜ、このように学習指導要領の構造化をするかといえば、深い学びを実現していきたいという方向性があるということを確認いただければと思います。

次に「柔軟」です。東京の目黒区や渋谷区の事例が有名です。目黒区では授業時間を従来の時間から 45 分・40 分に短縮し、余った時間を学校固有の活動や教員研修に充てています。渋谷区では、各教科の授業時数を 10% 減らす時数特例制度を活用し、減った時間を総合的な学習や探究活動に充てています。これにより、各学校の独自性や工夫を発揮できる方向性が議論されています。簡単に言えば、これまでの学習指導要領は、基準性・共通性がしっかりと担保されていましたが、そのことを前提としながらも、もう少し各学校の固有性や独自性といったものを発揮していく必要があるのではないかという議論になっているということです。

第三は「探究」です。これは、情報活用能力の抜本的な

向上と一体的に進めることが必要になってきます。幼児教育から小中高に至るまで、総合的な学習や探究活動に情報活用能力を一体化していくことで、探究との親和性を高めていくことが重要です。特に中学校では探究活動の実施状況に差があり、校長として、学校の固有性や独自性といったことに加えて、本当に探究としてふさわしい取組かを見極め、見直していくことが大切であると思います。

最後に「評価」です。評価は、知識・技能、思考・判断・表現及び主体的に学習に取り組む態度の 3 つの観点で行われます。主体的に学習に取り組む態度の評価についての議論が出ていることを受けて、この観点を評価しなくてよいという誤解が出ているようですが、これは正しくありません。これまで以上に重要であり、個人内評価を通じて、その子の成長や変容を長期的に把握し、適切に認めていくのが良いのではないのかという話し合いが行われているということです。ただし、この方法では評価結果が所見に反映され、評定に直結しないことが考えられます。この学びに向かう力・人間性というのは、プロダクトとしての知識・技能とプロセスとしての思考・判断・表現との親和性が非常に高く現れます。そこで、自分から挑戦する、友達と協力するなどの場面で評価しているときに、この学びに向かう力・人間性が顕著に現れたら、そこを評価していくという形を取れば、結果的に、それが評定の方にも反映されるのではないのかというような議論が出ているということです。したがって、評価をしないということではなく、今後の課題として、この評価をどのように反映するかという話し合いが行われているということです。

以上が、全体の中での主要な論点です。本日は少し駆け足でしたが、皆さんの今後の議論に資する内容を整理してお伝えしました。今後のワーキンググループ等の検討状況も随時情報公開いたします。関心をおもちいただければと思いますが、とりわけ重要なことは、今紹介してきた内容は、未来の学習指導要領の話ではなく、実は日々行っている授業と直結している、あるいは、皆さんが編成している教育課程とシンクロしているということです。関心をいただくことが、毎日の学校教育活動につながっていくということを紹介して、話を先に進めたいと思います。

これまで我々は、「何ができるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」という方向に向かって、資質・能力の育成に取り組んできました。全国の小学校・中学校の子供たちは熱心に授業に取り組み、先生方による積極的な授業改善が行われてきました。その中で ICT も取り入れられ、教育の質はより高まろうとしています。その意味では、最も重要なミッションは資質・能力の育成です。

この資質・能力の育成のためには、子供が主体的・対話

的で深い学びを行うことが不可欠です。おそらくこれが最上位の概念になります。今年度4月、文部科学省から新たな資料（みるみる）が出ました。資料にあるとおり、上位概念は「主体的・対話的で深い学び」であり、まさに資質・能力の育成を目指しています。その際、多様な子供の状況に応じて個別最適な学びと協働的な学びを意識していくことが大切だとされています。ただし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に取り組むことは歓迎されることですが、それ自体が目的化することがないように、「主体的・対話的で深い学び」を通じた資質・能力の育成という出発点に立ち戻って考えることが大切であるということもここで改めて確認をしておきたいと思います。

この「深い学び」をどのように実現するかが重要になります。例えば、広島の子供たちは総合的な学習の時間で探究的に平和について学び、様々な人から話を聞き、調べながら考えを深めていきました。ある授業で、先生が「どうして?」と問い返すと、子供たちは主体的な学びとしてグループで会話を始め、会話の質が向上していきます。各自の発話が他の発話とつながり、知識がネットワーク化されることを精緻化（エラボレーション）と言います。知識がつながることによって、深い学びが生まれるわけです。この「つながり」の考え方は、スティーブ・ジョブズの言う「Connect」と重なります。知識が単体でなく、様々な場面で使えるようにつながることにより、知識はより汎用的になります。そして、知識・技能が関連付いて構造化されたり身体化されたりして高度化し、駆動（ドライブ）する状態に向かうことが重要になります。では、どうすればつながるのかを一言で言えば、いかに活用していかかに発揮するかということになります。これは、学習指導要領総則にもすでに書かれていることです。活用・発揮は言い方を変えれば、アウトプットです。アウトプットは、言い方を変えれば、音声言語化・文字言語化です。音声言語化・文字言語化は言い方を変えれば、話す・書くという意味になります。そう考えると、日々の授業におけるアウトプット、授業における話すと書くをどれぐらい潤沢に質を高くやっているかが、全ての学校の授業においてかなり重要なポイントということになるわけです。御自身の学校において、話す・書くことの活動が少なければボリュームを上げていく、すでに取り組んでいれば今度は質を考えていく、今現在どこにいるかの問題ではないと思います。アウトプットするとネットワーク化し、つながった瞬間に、私たちは手ごたえや感情、場面などともつながり、そうやってつながった知識は剥がれ落ちにくく、長期にわたって保持されていくということが分かってきています。これが精緻化です。経験があるとおり、語呂合わせやグルーピングしておいた

方が記憶が長持ちする、印象的な出来事はずっと覚えていくというのは、まさにコネクトであり、そう捉えていただくと、このアウトプットの重要性が見えてくると思います。しかしながら、インプットをやらないということは言っていない。インプットも必要だが、インプットばかりしていくわけにはいかないということです。簡単に言えば、インプットよりもアウトプットをボリュームアップしていく、インプットをよりスリムでシャープでコンパクトでスマートにしていくということです。ここで重要になるのは、教師の指導性だと思います。この指導性は、無理やり強いてさせるということではなく、子供に寄り添い、多様性を認め、一人一人の良さが発揮できるような指導性ということです。さらに、ここにデジタル学習基盤を活用することで、深い学びと非常に親和性が高まります。将来、社会は情報化社会ということもありますが、入力情報が圧倒的に豊かになって処理しやすくなるとともに圧倒的なボリュームになり、深い学びに直結します。まさにこの1人1台端末を使わないわけにはいかないということなのではないかと思っています。

探究学習においても、先ほどの活用・発揮が非常に頻回するのがこの探究のプロセスとなります。このプロセスにおいては、各教科の知識・技能が非常に何度も繰り返し使われやすく、例えば、情報の収集は社会科の資料活用の力となり、整理・分析は算数・数学・統計データの活用として、まとめ・表現は文章表現となり、プロセスの充実には各教科の資質・能力の活用・発揮につながり、それぞれが相乗効果を生み出します。そして、この探究が学力向上に大きく寄与することが分かっており、OECDの調査でも日本の子供の学力が下降傾向から上昇傾向に変化したのは探究が寄与していることが示されています。現在、学力・学習状況調査とこの探究はきれいに相関が出ているという状況です。このように、学習の質を高めるには、アウトプットすればするほど長きにわたって残る、使えば使うほど長きにわたって残る、活用すればするほど長きにわたって残る、こういったことがはっきり見えてきています。そしてICTの活用は、深い学びとの親和性が高く、今後の教育活動においてますます重要になるということを確認していただければと思います。

こういったことを、各中学校が熱心にお取り組みいただくことで、中学校の教育を豊かにするだけではなく、地域といったものを豊かにしていくのではないかと思いますので、学校の存在意義を高めていく校長先生には、そういった方向性や将来性をお考えいただければと思います。そして、皆さんには、引き続き、情報交換を積極的に行っていただければと思います。本日はありがとうございました。

◆全体協議会

■第1研究協議題 全日中提案

**誰一人取り残されない一人一人を大切にしたい不登校
対応 ～COCOLO プランの効果的な実現を目指して～
全日本中学校長会教育研究部長 柳澤 忠男**

日本の中学校における不登校生徒数は、コロナ禍の令和2年度以降急増している。文部科学省は「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLO プラン）」や「不登校・いじめ緊急対策パッケージ 誰一人取り残されない学びの保障に向けて」を公表し、更なる対策の強化を求めた。

全日本中学校長会は令和6年度に「学びの保障に向けた取組について」として「多様な生徒に対する学びの保障について」と「外部機関との連携等について」の調査を実施し、その結果から現状の課題と今後の方向性について提言された。

1 COCOLO プランの趣旨と本会の調査

(1) 学びの場の確保

- ① 学びの多様化学校の設置を促進し、分教室型も含め全国で300校設置を目指す。
- ② 校内教育支援センター（スペシャルサポートルーム等）の設置を促進し、校内に落ち着いた環境をつくる。
- ③ 教育支援センター機能の強化、NPOの広域支援、メタバースの活用を進める。
- ④ 夜間中学や公民館・図書館等の活用や自宅等での学習を成績に反映させることを推進する。

【調査結果より】

学びの多様化学校は設置済・予定を合わせても25%未満だが、必要性は多くの学校で認識されている。スペシャルサポートルームは70%超の学校に整備され進んでいる。一方、オンライン支援やメタバース活用は40%ほどで、67%が「検証・改善が必要」と回答した。

(2) 「チーム学校」での支援

- ① 一人1台端末を活用し、心や体調の変化の早期発見を推進する。
- ② 教師やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、養護教諭等が専門性を発揮して連携する。
- ③ 相談窓口の整備やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーによる保護者支援を充実させる。

(3) 学校の風土の見える化

- ① 学校の風土等を把握するためのツールを整理して全国へ提示する。
- ② 子供たちの特性に合った柔軟な学びを実現す

るために、「授業」を改善する。

- ③ いじめ等の問題行動に対する毅然とした対応を徹底する。
- ④ 児童生徒が主体的に参画した校則等の見直しを推進する。
- ⑤ 快適で温かみのある学校環境を整備する。
- ⑥ 学校を、障がいや困難、言語等の違いに関わらず、共生社会を学ぶ場にする

【(2)・(3)に関する調査結果より】

不登校の未然防止に向けて、学校または地区における取組として、割合が高かったものは「スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、養護教諭等による早期発見に努めている」が最も高い。一方で、「生徒が学校で過ごす時間の中で最も長い授業について、生徒たちの特性にあった柔軟な学びを実現するための改善に努めている」は45.5%と最も割合が低かった。

【NPO やフリースクールとの連携に関する調査結果より】

NPO やフリースクールと「連携は行っていない」と回答する学校は38.2%、NPO やフリースクール等による自宅でのオンライン学習の今後の在り方については、74.6%の学校が「議論する中で検証し、改善していく必要がある」と回答している。

2 提言

(1) 学びの多様化学校設置による課題を共有する

全国で先行して設置された学びの多様化学校での課題を共有し、区市町村等の設置者に条件整備を求めるとともに、共有した課題の解決を目指す教育課程や学校運営方針について研究を重ねていく。

(2) スペシャルサポートルーム設置に向けた財政的な支援・徴税措置

設置に向けての課題を各学校の校長で共有し、校長会等の組織を通じて設置者等に支援を求めていく。また、スペシャルサポートルーム設置の目的をどこに設定し、対象をどのような傾向の生徒にするのかを検討し、教育支援センターとの役割分担を明確にする。

(3) NPO やフリースクールと連携を図り、対応状況を把握する

学校は個々のNPO やフリースクールの生徒への対応状況を担当者との面談や相互連絡によって把握し、不登校生徒の家庭外での生活について理解を進める。出席扱いについては、各学校の校長の判断となっているため、地区内の学校同士で規準についての情報共有は必要である。

(4) スクールソーシャルワーカーの成功事例をもとに、学校現場での活用を広げていく

一人一人の教員がそれぞれのケースにおいて、活用できる事例等を広く共有するとともに、デジタルも活用して、いつでも教員が事例に触れられることができる環境を整備していく。

■第2研究協議題 北海道地区提案

自治的な活動を柱とした人間尊重の教育～多様な他者との協働を通して磨く相互承認の感覚～

札幌市立美香保中学校 伊達 峰史



札幌市では、毎年度実施している札幌市全体の共通指標「学習などについてのアンケート」（以下「共通指標」という。）の結果から、「子供一人一人が、『自分は大切にされている』と実感できる学校づくり」をキャッチフレーズとした次の学校観をどう具現化していくかが全市共通の課題となっている。

学校は、「みんな違う」を原点として多様性を認め合い、「本物の経験」を通して、「自由」と「自主性」を学ぶとともに、責任ある行動をとる力を付ける場である。そのような学校において、子供の相互承認の感覚は醸成され、学校は、子供一人一人の「自立」を支える場となる。このことも踏まえ、校長会では、「新たな価値を見だし、持続可能な社会を創る力を育む札幌市中学校教育」を掲げ、七つの部において調査・分析に努め、特に、「生徒の主体的な課題解決を支援し、適切な自己決定の場を提供することで、自己肯定感、および自己指導能力を育ていく指導の在り方・充実・深化」というテーマの下、生徒・教師・校長を対象としたアンケート調査を実施し分析を行っており、その実践の概要や具体等について提言された。

I 実践の概要

令和6年度から、札幌市学校教育の大要をさっぽろっ子に育みたい資質・能力「学ぶ力（自ら課題を

見付け、自ら学び、自ら問題を解決する資質・能力）」をベースに構造化した「総論図」を全ての学校において共有し、これに基づく教育活動を推進している。

1 人間尊重の教育

令和4年度から、「人間尊重の教育」を札幌市学校教育の「基盤」と位置付け、相互承認の感覚を高める教育活動を推進している。

2 さっぽろっ子自治的な活動

人間尊重の教育を具現化していく一つの手立てとして、自治的な活動を推進している。

3 札幌らしいコミュニティ・スクール

「小中一貫した教育」と連動した仕組みとして、中学校区ごとの基本単位であるパートナー校において一つの学校運営協議会を設置する。

II 実践の具体

1 A校の実践

A校の校長は、教職員が当事者意識をもって学校づくりを進めていけるよう、問題意識の共有を組織マネジメントにおける肝とし、期首面談を丁寧に行い、教職員一人一人の教育活動に関わる問題意識をキャッチすることから始め、学校として着目する資質・能力の明確化を促した。そこから、相互承認の感覚を高め、自治的な活動の推進を図っている。令和7年度からCSを導入するに伴い、学校の要請に応じて子供の自治的な活動等を支援する組織「A中学校区応援団（仮称）」を設置したり、「第1回『A中学校区サミット』」を開催したりしている。

2 B校の実践

B校の校長は、「新たな価値の創造」を、「既存の教育活動と関連付けて骨太にすること」と捉え、変革に抵抗感を示す教職員の意識改革に努めたことで、校長の思いが、教職員と生徒にも浸透し始めている。「さっぽろっ子サミット」に参加した3名の生徒会役員が、他校とのグループ協議を通して、人と人がつながることの大切さを改めて実感して自校に持ち帰り、生徒会役員で対話を重ね、これまで行ってきたあいさつ運動と地域のゴミ拾いボランティアを組み合わせることで実施することとなった。

III 成果と課題

1 成果

(1) 「さっぽろっ子サミット」での熱い思い

サミットをきっかけとして、自分たちの思いや願いを自分の手で実現していこうとする意欲

や、リーダーとしての自覚や責任感を高めた中学校の代表生徒は、自信をもって自校の生徒会活動に取り組んでいる。

(2) 子供の手による横展開

子供運営委員会からの提案により、「さっぽろっ子自治的な活動に係る情報を共有するために、全市 Classroom が立ち上がり、各校の実践報告を児童生徒間で共有し合っている。

(3) 人間尊重の教育フォーラム

例年開催されている人間尊重の教育フォーラムは、子供の声を聴く場として成長しており、子供の思いや願いに心を揺さぶられない管理職・教員はいない。

(4) さっぽろっ子の意識

共通指標の結果から、相互承認の態度に関する子供の意識が徐々に高まっている。さらに、自分の声を届けるということについても、意識の高さが見られる。

2 課題

- ・ CS 導入に関わって、数年先、一部の地域の人が牛耳ることのないよう、新陳代謝が活発な組織にしていく必要がある。
- ・ 人間尊重の教育における自治的な活動の趣旨についても、家庭や地域との相互理解をより一層深めていく必要がある。

◆分科会

8つの分科会に分かれ、それぞれの担当地区から研究の取組と成果・課題について提案があり、熱心な研究協議が行われた。

第5分科会：北海道地区

〈一人一人の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実〉

・特別活動を要として進めるキャリア教育

倶知安町立倶知安中学校 佐々木 淳



後志小中学校長会では、各学校における学校経営方針及びグランドデザインへのキャリア教育の位置づけについて再確認を図るとともに、改めてキャリア教育における総合的な学習の時間と特別活動の関連について、教職員への意識改革や教育課程改善等の課題に取り組んできた。令和5年度より研究主題「組織力を高め、人を育てる学校経営」と定め、管内を4つのグループに分け共同研究している。校種による研究課題はまず、各町村課題の解決を研究の主としている。令和5年度（研究当初）は、① 学校経営方針への「キャリア教育」の記載、② 記載されている「キャリア教育」の内容、③ 各校が抱えている「キャリア教育」の課題についての実態調査を行い、令和6年度は学校経営の振り返り（変容）として① どのようなことを重点的においているか、② 校長のリーダーシップを意識したことの調査を行った。

研究の成果として、①子供が「仲間と協働して課題を乗り越える楽しさを体験」によって、単に職場体験活動を行うのではなく、課題発見から解決まで取り組んだ達成感を味わうこと、自分の得意なことややりたいことを磨きたい気持ちや人の役に立ちたいという意欲をもつことができ、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を身につけることができた、②職場体験活動のみをもってキャリア教育と捉えるのではなく、特別活動を要としてキャリア教育を教育課程に位置づけようと改善することができた、③キャリア・パスポートを、それぞれの地域の実情に応じて、作成改善、工夫することができたことが挙げられる。

・社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育

小樽市立西陵中学校 駒場 秀剛



小樽市中学校長会は、「北海道教育推進計画」「小樽市教育推進計画」「教育行政執行方針」に基づき、

①資質・能力を意識した系統的なキャリア教育, ②外部講師を活用した地域の特徴を生かしたキャリア教育, ③進路の選択ができる力を養うキャリア教育の3観点を設け, 研究を進めてきた。令和6年度は研究初年度ということで, 全校からどのような取組を行っているかアンケートをとり, 各校の実態を捉え, 特色ある実践から, 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育を目指して, 改善に取り組むこととした。

研究の成果として, 令和6年度の全国学力・学習状況調査における「将来の夢や目標をもっていますか」の質問において, 「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の肯定的な回答は, 68.1%で, 全国平均よりも1.8%上回った。また, 「人の役に立ちたいと思いますか」の質問においても肯定的な回答が0.8%上回った。これは, 小樽市立中学校の特色ある実践の成果であり, 生徒たちがこれからの人生をより良く生きていこうという高まりの表れであると捉えている。この結果を受けて, 小樽市では, 教育推進計画において令和10年度には, 前者については80%を上回ることを, 後者については100%となることを目標値として上方修正しており, 中学校への強い期待の表れと受け止めている。

小樽市中学校長会では, 「社会人・職業人として自立できる力を養う系統的なキャリア教育」について各学校の実態を踏まえた特色ある実践を更に積み重ねることで, 生徒の社会的・職業的自立の基盤となる資質・能力を育んでいきたい。

分科会の最後に, 全日中を代表して平野 茂給と対策部長, 山田 誠一副会長(道中会長)から後志小中学校長会・小樽市中学校長会の提言発表とその後の各グループでの研究討議の様子を踏まえた振り返りと助言が行われ, 参加者全員が確かな成果を実感し分科会を終えた。



なお, 佐々木, 駒場, 両氏の提案の詳細については会誌「全道中」No.95号(令和8年3月1日発行予定)に掲載する予定である。

他の分科会の研究協議題と概要は次のとおりである。

第1分科会：東海北陸地区

〈「カリキュラム・マネジメント」の推進〉

「目指す姿」を具体的にした教育課程の編成・実施・評価・改善の実践事例, 人的又は物的な体制の確保と改善を図っていくことの現状と課題等が発表された。

第2分科会：東北地区

〈「主体的・対話的で深い学び」の実現〉

「主体的・対話的」で深い学びを通して確かな学力の育成を図る学校体制や取組に関する研究内容, 地域を創る「総合的な学習の時間」の実践概要等が発表された。

第3分科会：関東甲信越地区

〈よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実〉

生徒のレジリエンスを育てるための実践事例, ともに学び成長し合える学校づくりに向けた取組等が発表された。

第4分科会：中国地区

〈健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実〉

生徒の防災意識の向上と実効性のある防災学習の取組, 学校・地域の特性をいかした健康・体力課題解決の取組等が発表された。

第6分科会：近畿地区

〈自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実〉

不登校対策・未然防止を軸とした魅力ある学校づくりの取組, 自己指導能力の育成に向けた実践事例等が発表された。

第7分科会：九州地区

〈「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成〉

キャリアステージに応じた資質・能力の向上を図る人材育成の取組事例, 教職員の意識改革と資質能力の向上に向けた実践事例が発表された。

第8分科会：四国地区

〈学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と

「働き方改革」の実現

探究し続ける生徒の育成を目指した学校・地域の連携・協働の取組，地域と連携した防災教育・防災活動と部活動改革の実践事例が発表された。

◆アトラクション 「サヌカイト演奏」

サヌカイト演奏者 小松 玲子 氏



小松氏は香川県高松市で生まれ，高松第一高校音楽科，東京藝術大学打楽器科（四国出身者初）を卒業。これまでに 有賀誠門，高橋美智子，菅原淳，石内聡明，森ゆき子に師事し，東京藝術大学管弦楽研究部元講師，東邦音楽大学附属第二高校元講師，高松市観光大使を務める。平成 28 年度よんでん芸術文化奨励賞，東久邇宮文化褒賞を受賞している。

サヌカイトという讃岐国（現在の香川県）から産出する鉱物である讃岐岩から造られる世界的にも珍しい楽器を使った小松氏の演奏は，日々の喧噪を忘れさせるような軽やかで心地よい響きで会場を満たし，その演奏と音の素晴らしさに場内からは盛大な拍手が送られた。

◆全大会 大会宣言決議



◆記念講演 演題「AI の最新動向と今後の展望」

講師 東京大学大学院工学系研究科教授

松尾 豊 氏



松尾氏は，1997 年に東京大学工学部電子情報工学科を卒業し，2002 年に同大学院博士課程修了。産業技術総合研究所研究員 スタンフォード大学客員研究員を経て，2007 年より東京大学大学院工学系研究科准教授，2019 年より同教授となる。専門分野は，人工知能，深層学習，ウェブマイニングで，人工知能学会からは，論文賞，創立 20 周年記念事業賞，現場イノベーション賞，功労賞の名誉を受賞。2020 年から 2022 年には人工知能学会，情報処理学会理事を，2017 年より日本ディープラーニング協会理事長，2019 年よりソフトバンクグループ社外取締役，2021 年より新しい資本主義実現会議有識者構成員，2023 年より AI 戦略会議座長，2024 年より AI 制度研究会座長，一般社団法人 AI ロボット協会理事を務めている。

AI の現状やこれからの展望について詳しい説明をいただいた後，参加者から出された質問に丁寧に答えていただき，今後の教育活動と AI の在り方を深く考えるきっかけとなる大いに示唆に富む内容であった。

◆閉会式

青海大会長，北岡実行委員長が今大会を振り返り，成果を確認するとともに，それを明日からの学校経営の確実な前進に結び付けていくことを呼びかけた。

最後に，次年度開催となる長野県より，その自然，歴史，産業を背景とする風土の紹介と大会準備の進捗状況等を含めた次大会を大いに期待できる挨拶があり，全ての日程が終了した。



論 文

教職員の資質・能力の向上を図る
「プロジェクト学び」の実践

札幌市立藤野中学校 小田島 潔 恵

1 はじめに

本校は昭和 58 年に札幌市 67 番目の中学校として開校した。市の南側に位置し、周囲を公園や果樹園、丘陵に囲まれ、近くには道立高校 1 校とスキー場がある。さらに、定山溪温泉へと続く国道 230 号線が校区を貫き、沿道には大型商業施設が列をなしている。

また、地域は都市基盤の整備も進み一大住宅地となっているが、古くから住む住民と新興住宅地に新たに流入してきた住民とが混在している。現在は少子化と高齢化が進んでおり、学級数も最盛期の半分以下である。

2 現状と課題

生徒は明るく、物おじしない傾向にあるが、論理的思考や記述、学習計画の立案などを苦手とし、学習に関する課題は少なくない。しかし、授業に真面目に取り組む生徒が多く、グループ学習にも屈託なく参加することができている。

教職員については毎年、新採用や 2 校目という経験の浅い若い教員が多く在籍し、20 歳台が全教員の約 3 割を占めている。そのほとんどが新型コロナ感染症の流行後に教職に就いており、コロナ以前の学校を知らない世代である。そのため、新しいことに抵抗なく取り組める反面、コロナ禍以前に行われていた学習活動についての意義や方法を知らず、行事の見直し等では議論が深まらないことがある。

熱心な教員が多く、活気が感じられ、意欲的な教師集団であるが、経験不足を補い、教員・生徒双方の課題を解決するためにも人材育成と授業改善が重要であるといえる。

3 具体的な取組

(1) 「プロジェクト学び」の取組について

本校では教務部研修係が中心となり校内研修を推進している。係が主催する教員全員が対象の校内研修会の他に、若手教員を中心にした「プロジェクト学び」という取組がある。『藤野の生徒に合った授業』を展開するための授業改善を目標に、形を変えながらもすでに 10 年以上続けられている取組である。

昨年度からはねらいを「子供の姿の見取り方や分析方法を学び、今後の学級経営や授業づくりについて考える」と設定し、授業研究を行っている。

(2) 授業改善への具体的な取組

令和 6 年度は外部講師として、北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻 教育方法学（授業研究）の宮原 順寛准教授を招いた。有志による「プロジェクト学び」の研修会に 3 回来校していただき、その都度、授業（3 教諭×2 時間）の観察と授業分析、検討交流会を行っていただいた。授業観察の視点、教科にとらわれない子供の姿の見取り方法や授業の分析方法を学ぶことができた。まさしく「目からうろこ」ともいうべき内容で、「学び合うこと」を大切にしたい授業改善のために多くのことを御教授いただいた。参加した教員がこの研修後すぐに、共同して学び合える座席配置を工夫したり、発問づくりに取り掛かったりと学びを実践に生かす姿があった。また、12 月に開催した全教員を対象とした全校研修会においても宮原氏に講演していただき、「プロジェクト学び」を含む、研修のまとめとした。授業研究の方法や生徒と学び合うことなど、これまでの概念を塗り替えるような内容にベテラン層のやる気も引き出され、大変有意義な研修となった。

今年度の研修では昨年度宮原先生に授業分析を受けた教員が中心となり、授業研究に主軸を置いた全校研修を行っている。（令和 7 年 11 月末現在）

(3) 小中連携との関わり

「プロジェクト学び」の研修の一つとして、11 月には若手教員が小中連携パートナー校である中学校区の 3 小学校にそれぞれ出向き、6 年生を対象に授業を行った。小中 9 年間の学びの連続を意識するとともに、小学生の中学校に対する不安を取り除く効果もあり、例年成果をあげている。これまでも全市で研究日を設定し、パートナー校と小中合同研修会を行っており、小中間の教職員間の交流は深まってきている。

4 おわりに

一般の企業と同様に、教育現場においても若手を育てる立場の人材が著しく少なく、世代間での対話や技術の継承が急務である。経験やキャリアに応じた専門性を高め、学び合うことで同僚性を高められる研修体制を構築し、教育活動の質を維持することがより一層求められると考える。目指す生徒像の実現のために、生徒とともに日々学び続ける教職員集団づくりにこれからも尽力していきたい。

論 文

新しい学校づくりを通した
子供たち・大人たちの絆づくり

中頓別町立中頓別中学校 倉 照 彦

1 義務教育学校は、社会教育との複合施設へ

中頓別町は宗谷管内南東部に位置し、林業と酪農を主な産業とする人口約1,400人の町である。

令和元年、町内施設の老朽化、少子化が進んだことから、「学校のあり方についての検討準備会」が設置され、以降、町民アンケート、教職員・中学生ワークショップを踏まえ、①小中統合し義務教育学校とする、②町教委・給食センター・図書館・町民センターの社会教育複合施設とする、③新しい小学校舎を改築・増築する、との案が決定した。

2 「人生100年学びの拠点」への手立て

町は「新しい学校づくり」を、『ウェルビーイング（自己肯定感・心身の健康・社会貢献・自己実現）を持ちながら生き抜くための「人生100年の学びの拠点」の創造』と捉え、令和4年度、教育委員会に「新しい学校推進室」を設置。義務教育学校「中頓別学園」への企画推進役を担うこととした。

開校に向けては、小中統合や建物（ハード面）を「つくる」だけでなく、新しい学校への心（ソフト面）をいかに育むかが課題だった。そこで小・中の総合的な学習に「新しい学校づくり授業」を設け、子供たちが思っていること・考えていることを言葉にする、仲間の考え・アイデアを聴いて深める、みんなの前で発表できる、そんな授業を推進室が実施した。令和6年度はイメージ共有と土台作り、令和7年度は学校への願いを元にしたルールづくりと校歌・校章作成を行った。また保護者・地域の大人が児童生徒と一緒に学ぶ授業「なかとんミーティング」を4回実施し、統合の不安や疑問を解消しつつ、保護者・地域の方と協働を進めることができた。

教職員との企画・準備は、「学校づくり委員会」を月1度で放課後に実施した。小中教職員が一同に介し、新しい学校の検討課題や研修を提示。協議を元に意見反映し、分掌や担当で詳細な検討を進めた。

施設工事は、中学校舎への小学校の受入れ準備から始まった。理科技術室、美術図工室など特別教室の統合、空き教室の小学教室化、玄関一部の教材室化、トイレのリフォーム、技術室・準備室を改造し小学職員室・校長室とした。令和7年度春休みに小学校が引越し実施。始業式から小中共同生活が始まった。

新校舎工事は2度入札不調だったが、随意契約で5月着工。令和8年度は現校舎で義務教育学校を開校し、令和9年春に新校舎完成。夏に新校舎引越し予定である。

3 小中共同生活で互いに学び合う

共同生活するまでの小中の教職員関係は、決して良好ではなかった。子供の学力・生活力不足、中1ギャップなどの不適応を互いの指導に起因すると捉え合い、子供を中心とした協力協働ができていなかった。

だが4月から様子は一変した。小学生の元気な声が校内にあふれ、中学生は小学生の手をつないで登校する優しさや頼もしさがみられ、心配されたトイレなどの器物破損では、「小・中みんなにとって安心安全な学校にしよう」との指導が生徒の心に響き、大切に使う意識が芽生えた。教職員は小中互いの苦労を学んだ。小学生のケア対応やケンカ指導、児童と教員一緒に掃除する姿から、安全指導と環境整備を主体的に行う生徒指導を学んだ。中学校では定期テスト実施や成績評定、進路につながる実態を学び、遅くまで部活動に参加する姿をみて、中学校の大変さを理解した。中体連や吹奏楽コンクール壮行会は、小学生も参加しての応援集会となった。

運動会、文化祭は小中1週間ずらして行ったが、機材の共用、準備・片付けの分担、時間や場所を調整して乗り切った。互い的大変さを理解し、スムーズに進む方法を考え、小中をつなげることができた。

4 「つくる・つなげる・つみあげる」

これは、中頓別学園の「学校教育目標」である。

つくる・つなげる取組として、情報管理研修や合同避難訓練を行い、小中同一研究主題の校内研修で、授業交流と理論研修（UDL、学びの共同体）を行った。特別支援では、令和5年度にフリースクールが設置され、不登校生徒の学びの場が始まった。令和7年度配置の通級指導教員も指導に参加し、学校・保護者の関係改善が進んだ。9月の修学旅行はスクールカウンセラーを同行させ、フリースクール生全員の参加が実現し、進路指導につなげることができた。「子供支援ネットワーク会議」は、こども園・小・中・町教委・保健福祉課が参加し、気になる子供の情報共有と切れ目のない支援が進んでいる。

令和8年度から1年生～9年生「4・3・2制」の教育課程が始まる。授業（45分と50分）と休み時間（5分と10分）の日課表、専科指導、7～9年生の単元テスト化など課題が残っている。教職員のベクトルを合わせ、組織的な協議と関係者への感謝と激励を大切に、互いにウェルビーイングな教育実践を、子供たち・大人たちの絆でつみあげていきたい。

論 文

学校教育目標を据え、生徒と地域の ウェルビーイングを高める中学校教育の創造

帯広市立緑園中学校 萩 原 徳 幸

1 はじめに

本校は、「学ぶ人」「思いやる人」「鍛える人」を学校教育目標に掲げ、変化の激しい時代をたくましく生き抜く生徒の育成を目指して教育活動を展開している。

学校は生徒にとっての学びの場であると同時に、地域に希望や活力をもたらす存在であることが期待されている。今年度は、公開研究会を核とした授業改善、地域・関係機関との連携強化、生徒の主体性を引き出す教育活動を通して、重点テーマ「頑張ることは格好いい!」という価値観を学校文化として定着させるために、校長として、生徒・教職員・保護者・地域の願いを学校経営の中核に据え、学校教育目標を最上位に位置付けた教育活動を推進していかなければならない。

2 学校教育目標の実現を目指した教育活動の実践

(1) 学校教育目標を据えた学校経営

本校では、学校教育目標「学ぶ人・思いやる人・鍛える人」を全ての教育活動のよりどころとし、校内外に発信してきた。特に、重点テーマである「頑張ることは格好いい!」を日常の教育活動や生徒指導の場面で具体的に語り、称賛する取組を行っている。

学校経営においては、校務運営委員会を中心とした推進体制を整え、校長の経営方針や教育理念を正確かつ継続的に現場へ届けることを重視し、教職員一人一人が自らの実践を学校教育目標と結び付けることで、組織としての一体感と心理的安全性が高まり、主体的な教育実践につながっている。

(2) 公開研究を核とした授業改善の推進

今年度は、公開研究会に向けた取組を通して、授業改善を学校全体の共通課題として位置付け、「生徒にどのような力が身に付いたのか」「その姿は学校教育目標とどのようにつながるのか」という視点で、授業を振り返り、改善を重ねてきた。授業においては、ICT を効果的に活用し、対話的な学びや協働的な学びを意図的に取り入れ、生徒が自ら考え、仲間と関わりながら学びを深める姿を大切にしている。

その結果、学ぶことへの前向きな姿勢や、自分の考えを表現しようとする生徒の姿が多く見られるようになってきた。

(3) 地域・関係機関と連携した教育活動

本校は、地域や関係機関との連携を教育活動の重要な柱としている。地域人材の活用や外部講師による学習、キャリア教育の充実を通して、生徒が社会とつながりながら学ぶ機会を意図的に設定している。

これらの取組は、生徒にとって学びが社会と結び付いているという実感をもたらし、学習意欲や自己肯定感の向上につながっている。また、地域にとっても、学校が人と人をつなぐ拠点となり、地域のウェルビーイングを高める存在として機能している。

(4) ウェルビーイングを高める学校づくり

新教育振興基本計画の理念を踏まえ、本校では「知・徳・体」の調和的な向上を重視した教育活動を展開している。生徒一人一人が安心して挑戦できる環境を整え、努力の過程を認め、称えることで、ウェルビーイングの向上を図っている。

学校運営協議会においても、「生徒がどれだけ成長し、満足感を得ているか」という視点を大切にしながら熟議を重ね、学校と地域が同じ方向を向いて子供を育てる体制づくりを進めている。

3 おわりに

今年度の教育活動を通して、学校教育目標を最上位に据えた学校経営が、教職員の意識改革と生徒の前向きな成長につながっている。教職員が共通の理念のもとで授業や教育活動を創り上げることで、生徒は「頑張ることは格好いい!」という価値を実感しながら学校生活を送ることができている。

今後も、生徒の姿を起点に教育活動を見直し、授業改善と地域連携を一体的に進めていくことで、「学校が生徒と地域の幸せを創り、教育が人を幸せにする」緑園中学校の教育をさらに深化させていきたい。



30 年後の未来を見据えて

岩内町立岩内第一中学校 大 崎 未 生

自分と同年代のベテランの先生方が、若い先生方の話に熱心に耳を傾けながら研修し、デジタルツールを活用した「学習者が主体となる授業」に挑戦している姿は、実に頼もしく心から敬意を表したい。ベテラン教師のもつ広い視野と鋭い感覚に、最新のデジタル技術が加わると、その教育の質は飛躍的に向上するはずだ。

一方で、いまだに「教師主体の講義形式（チョーク＆トーク）」のみで展開されている授業がなくなるという現状もある。そうした授業を見ると、未来を生きる子供たちに対し、申し訳なく感じざるを得ない。

義務教育の目的に「国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うこと」と示されている。ならば、子供たちが社会の主役となる 20 年後、30 年後の未来において必要とされる資質とは何かを、私たちは今一度問い直す必要がある。

教育の基盤は、常に時代の要請に応じて変化してきた。戦国時代、武士にとって「剣術」は必須の教養であり、幼い頃から厳しい鍛錬が課された。江戸時代には、町人が実社会を生き抜くための基盤として「読み書きそろばん」が隅々まで普及した。戦後の高度経済成長期には、豊富な知識を素早く正確に処理できる人材が求められ、

一律一斉の詰め込み教育が主流となった。平成に入り、「生きる力」の育成や「個性の尊重」へと教育方針は大きく転換した。

そして現在は人工知能（AI）が急速に進化し、多くの人がその便利さを実感していると同時に、学校の授業でも AI の活用が始まっている。海外では人間のように自律的に学習するロボットの実用化が進み、「人型アンドロイドが一家に一台」という時代は、もはや絵空事ではない。このような時代に、子供たちに不可欠な力は、既に AI が担うことのできる知識の暗記ではない。それは、「問題を自ら見付け出す力」、「技術を駆使して解決策を創造する力」、そして「あらゆる人々と協働する力」である。

学校の授業は、まさにこうした未来志向の力を育む場へと転換しなければならない。もちろん、新しい学びを進めると同時に、他人の痛みに共感できる心や感謝の気持ちなど、「心の教育」や「人間性のかん養」という土台が不可欠であることは言うまでもない。普遍的な人間性を根幹に据えながら、未来の社会を生きていく力を授けていく。それこそが、今を生きる私たち教師の使命である。



AI（愛）とは

～想いを言葉で伝えること～

旭川市立東明中学校 林 真千子

2 学期の始業式で 3 年の代表生徒がこんな決意を述べていた。「この 2 学期、今の 3 年生にしかできないひたむきさ、がむしゃらさで学校祭を創り、後輩たちに何かが届いてくれたらいい。そして、それが何年経っても変わらない東明中の伝統になってくれたらうれしい。中学生の今しかできないこの時間を大切に、想いを言葉で伝えていける日々になりたい。」代表生徒の優しく、でも強く、熱く語りかけるような話し方。大きく頷く 3 年生に、まっすぐ前を向き真剣に聴き入る後輩たち。

そして、この言葉は私の心にも深く響いた。研ぎ澄まされた感性とみずみずしさ、想いの強さ、先を見通した考え方、視野の広さ・・・校長職に就くと人前で話をする機会が多いが、私にはこんなにも人の心を動かす話ができない。ただこれはこの生徒に限ったことではなく、式や集会の度に、子供たちの話に感心させられている。

改めて考えると、これは子供たちが小学校から積み重ねてきた毎日の授業「主体的・対話的で深い学び」の中で培われてきた力ではないか。自分の考えや意見

を他者と比較しながら、より良いものに推敲し高めていく。そして、他者に伝わる話し方を工夫していく・・・日々の教育のたまものではないだろうか。

現在、AI の技術進化は目覚ましく、プロンプトや条件を細かく指定すれば、あっという間に、自分が思い描いていた以上に耳当たりのよい文章を生み出してくれる。人は人が生み出したテクノロジーに凌駕されるのではないか、そんな危惧を抱いていた。しかし、そんな心配は子供たちが払拭してくれた。相手を想いながら、言葉を選び、自分の声で、自分の言葉で、自分の想いを伝える。自分の失敗や成功、仲間と協働した体験を通して考えたこと、だからこそ、強い説得力がある。時代がどんなに変化し AI が進化しようとも、人の言葉には血の通った温かさがあり、相手の心を強く動かす力がある。そして、子供たちの心を動かす源こそ、教師の言葉や姿にあるのではないだろうか。

私たちは自分たちの仕事に、子供たちへの愛に、もっと自信をもつことが大切ではないか。ある校長の詠んだ川柳が、見事にそれを言い当てている。

「我らには AI にない AI（愛）がある」

後 期 情 報

北海道中学校長会 事務局長 高 橋 正 幸

○今年度の活動を振り返って

現在、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、一人一人の個別最適な学びや、協働的な学びを充実させ、実現するなど、「令和の日本型教育」を構築することが求められています。

北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性、しなやかさを発揮しながら、山田会長による「こどもまんなかへ 堅実に歩む道中」をキャッチフレーズに、全道 20 地区の全会員相互の連携のもと、全道の中学校が抱える諸課題の解決に向けて取り組み、新たな中学校教育の創造を目指し、道民の負託に応えてまいりました。

また、道教委・道小をはじめとする関係機関との緊密な連携と、地区校長会との協働や情報共有を大切にし、本道の中学校教育の振興を図ってまいりました。

以下にお示しする内容はその一部です。

- ・ 全日中理事会参加や全日中への様々な意見書提出
- ・ 文教施策・予算要望に関する要望書の手交
- ・ 道教委との意見交換会・各課懇談会の実施
- ・ 道小とともに道教委との連絡会議の開催
- ・ 地区別教育経営研究会への参加
- ・ 会同による理事研修会等の開催
- ・ 第 66 回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会の開催
- ・ 道教委の各種施策への意見・要望の集約

○第 66 回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会の開催

9月26日、27日に開催した第66回北海道中学校長会研究大会胆振・室蘭大会は、320人を超える参加者が集まり、

昨年度の十勝・帯広大会に引き続き会同形式での開催となりました。



胆振管内校長会の皆様には、きめ細やかな準備と心温まる運営をしていただき、心より感謝申し上げます。今大会の成果が、次年度の第77回全日本中学校長会研究協議会長野大会、そして、第67回北海道中学校長会研究大会函館大会に引き継がれることを願っております。

○来年度の事業について

「こどもまんなか」の考えをもとにした教育活動の推進や多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成など、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮し、学校からの「教育改革」と「学校における働き方改革」の推進を図っていく必要があります。「子供を主語」とした教育活動を根底にし、本道の中学校教育の更なる振興に努めてまいりますので、今後とも御指導いただきますとともに、御理解と御協力をよろしくお願い申し上げます。

来年度の事業計画は、2月に開催される第5回理事研修会を経て、4月の総会で決定となります。

受賞おめでとうございます (道中関係分)

☆令和7年度文部科学大臣教育者表彰

山 田 誠 一 校長 (北海道中学校長会会長)

室蘭市立室蘭西中学校長)

☆令和7年度北海道教育功労者表彰

伊 藤 道 彦 校長 (北海道中学校長会副会長)

豊頃町立豊頃中学校長)

増 田 正 弘 校長 (北海道中学校長会理事)

八雲町立八雲中学校長)

柴 田 真 琴 校長 (北海道中学校長会前副会長)

仁木町立仁木中学校長)

道中事務局日誌

2025. 10. 22～2026. 1. 31 (予定含)

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
10	22	水	全日中常任理事会(山田) 全日中理事会(山田, 高橋, 吉本, 代永)	13:00	JR ホテルクレメント高松
			全体協議会運営委員会(伊達, 伊藤) 分科会運営委員会(佐々木, 伊藤, 駒場, 佐川)	13:30	JR ホテルクレメント高松
			歓迎レセプション(山田, 高橋, 吉本, 代永, 伊達, 伊藤, 佐々木, 伊藤, 駒場, 佐川)	18:00	JR ホテルクレメント高松
10	23	木	第 76 回全日中研究協議会香川大会【開会式・文部科学省説明・全体協議会・分科会】(北海道参加者 62 名)	9:45	レグザムホール(大ホール), (小ホール)他,
10	24	金	第 76 回全日中研究協議会香川大会【アトラクション・全体会・記念講演・閉会式】(北海道参加者 62 名)	9:20	レグザムホール(大ホール)
10	25	土	北海道青少年科学技術振興作品展審査会(北村)	9:00	札幌市立豊平小学校
10	27	月	第 2 回部活動・地域クラブ活動関係者会議 Web(山田)	14:00	自校
10	29	水	道中研胆振・室蘭大会 開催地関係機関 終了報告とお礼挨拶(山田)	10:00	胆振教育局, 室蘭市教育委員会
10	31	金	第 80 回記念北海道算数数学教育会研究大会札幌大会開会式(山田)	9:30	かでる 2・7
10	31	金	第 1 ブロック研修会(山田)	15:30	札幌エルプラザ
11	1	土	北海道 P T A 連合会役員会・正副委員長会 WEB 会議(岡田)	10:00	自校
11	1	土	日本教育会第 50 回全国教育大会大阪大会 Web(山田, 高橋)	12:40	各学校
11	4	火	「北海道教育の日」第 18 回制定記念行事(田丸・前田)	15:00	ホテルライフォート札幌
11	4	火	第 4 回五役研修会(五役, 専任職員)	15:00	事務所
11	5	水	HBC 第 53 回北海道中学生作文コンクール審査会(中井)	13:30	北海道放送本社
11	7	金	道中研胆振・室蘭大会 開催地関係機関 終了報告とお礼挨拶(山田)	11:00	むかわ町教育委員会
11	7	金	地区別教育経営研究会【空知地区】ハイブリッド形式(松田, 山田・高原(道小))	15:00	自校
11	8	土	日本教育会北海道支部研究大会渡島・檜山大会 Web(山田)	14:00	自校
11	11	火	第 7 回小中合同研修会(五役)	10:00	道小事務所
11	12	水	北海道産業教育審議会(高橋)	15:00	TKP 札幌ホワイトビルカンファレンスセンター
11	13	木	日本スポーツ振興センター災害共済給付事業運営協議会(福井)	14:00	北農健保会館
11	14	金	全日中副会長会(山田)	14:30	全日中会館
11	14	金	第 4 ブロック研修会(高橋)	15:00	新ひだか町コミュニティセンター
11	17	月	第 1 回北方領土学習資料編集委員会(北村)	13:30	札幌ガーデンパレス
11	21	金	第 3 回北海道教員育成協議会(前田) Web	10:00	自校
11	21	金	運営委員交流会(五役, 運営委員, 専任職員)	10:30	事務所
11	21	金	第 4 回理事研修会(五役, 副会長, 理事, 運営委員, 幹事, 専任職員)	13:45	道特会館
11	21	金	道中研全体研修会「引き継ぎ会」(五役, 胆振・室蘭大会実行委員会, 函館大会準備委員会, 研修部, 専任職員)	15:30	道特会館
11	25	火	北海道中学校体育連盟 臨時副会長会 Web(吉本)	13:00	自校

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
11	26	水	日本教育公務員弘済会第 2 回幹事会（高橋）	18:00	ホテルライフオー・札幌
11	27	木	公立高等学校入学者選抜改善の検討に係る懇談会 Web（高橋、前田）	9:30	自校
11	27	木	北海道功労賞贈呈式（山田）	10:00	京王プラザホテル札幌
12	2	火	臨時五役研修会（五役、専任職員）Web	10:00	各校、事務所
12	3	水	文部科学大臣表彰：教育者表彰（山田）	12:45	文部科学省
12	5	金	第 7 回事務局研修会（五役、筆頭副会長、各部幹事、専任職員）	15:00	道特会館
12	6	土	北海道 P T A 連合会役員会・理事会等（岡田）	10:30	かでの 2・7
12	7	日	令和 7 年度北海道青少年科学技術振興作品展 表彰式（北村）	13:00	札幌市青少年科学館
12	9	火	令和 7 年度北海道教育実践表彰選考会議（小泉）	14:00	T K P 札幌ホワイトビルカンファレンスセンター
12	15	月	北の専門高校 ONE-TEAM プロジェクト S 7 サミット（高橋）	9:00	第二水産ビル
12	16	火	令和 7 年度教育職員免許法認定講習検討会議 Web（高橋、福井）	14:00	自校
12	19	金	北海道・札幌市公立学校教員採用に関する協議会（高橋）		書面開催
12	22	月	特別免許状検定協議会 Web（前田）	9:00	自校
12	22	月	北海道男女平等参画審議会（中井）	14:00	かでの 2・7
12	23	火	令和 7 年度小中学校免許状併有のための認定講習検討会議 Web（前田）	9:00	自校
1	9	金	第 53 回 H B C 中学生作文コンクール道南地区表彰式（山田）	13:00	函館北洋ビル
1	15	木	第 5 回五役研修会（五役、各部副部長、専任職員）Web	14:00	各校、事務所
1	16	金	全日中基金管理運営委員会 全日中 第 3 回常任理事会 Web（山田）	11:00	自校
1	16	金	全日中 第 3 回理事会 Web（山田、高橋、吉本、代永）	13:00	自校
1	16	金	第 4 3 回全道 P T A 広報誌コンクール審査委員会（岡田）	15:00	北海道新聞社新本社
1	21	水	第 8 回事務局研修会（五役、筆頭副会長、各部幹事、専任職員）	10:15	ホテルライフオー・札幌
1	22	木	令和 7 年度北海道環境教育等推進懇談会 Web（宮田）	10:00	自校
1	26	月	第 2 回学校における働き方改革促進会（山田）	14:00	道庁別館
1	26	月	北海道 P T A 連合会第 2 回事務局長会等 Web（岡田）	14:30	自校
1	27	火	第 3 回部活動・地域クラブ活動関係者会議 Web（山田）	10:30	自校
1	27	火	北海道・札幌市公立学校教員採用に関する協議会 Web（高橋）	15:00	自校
1	28	水	第 8 回小中合同研修会（五役）	10:00	道小事務所
1	30	金	第 4 3 回全道 P T A 広報誌コンクール審査委員会（岡田）	15:00	北海道新聞社新本社

北海道中学校長会

発行者 会長 山田 誠一

編集者

道中情報部